

Title	<紹介>信多純一著『祈りの文化—大津絵模様・絵馬模様—』
Author(s)	川崎, 剛志
Citation	語文. 2011, 96, p. 73-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69175
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

信多純一著『祈りの文化——大津絵模様・絵馬模様——』

川崎 剛志

本書は、「関西でも知る人ぞ知る絵画になってしまった」大津絵の魅力と真価を、二百七十にも及ぶ図版とともに縦横に論じた研究書であり、啓蒙書でもある。

本書の著者である信多先生は、大津絵の魅力をこう語られる。

「一見して飄逸なこれら大津絵、実はこの裏には重要な深い意味をもつものであって、興味深いおもしろいものでもあるのだ。それを読みとくと日本人の心のひだに分け入ることができる民画なのである」（はじめに）。

また、ご自身の研究を振り返って、『『けいせい反魂香』の作品成立について論文を書くことになり、大津絵師又平や大津絵画題、そして作品全般に大津絵を近松が散りばめて作文していることなどを知り、大津絵の画題に興味を持ち始める』（Ⅰ大津絵）とも述べられる。

その論文は『傾城反魂香』試論（一九七五）であり、後に『近松の世界』（一九九一）に収載された。『傾城反魂香』試論のうち「四 作品上の諸問題」は「その1 吃又の位置づけ」「その2 大津絵模様」から成っており、本書の副題の半分が三十年以上前から用意されていたことを知る。本書はこの「大津絵模様」を「絵馬模様」と重ね見ることにより、大津絵の本質が

「祈りの文化」であることを明らかにする。

以下、本書の構成にしたがって、その内容をみていく。

「Ⅰ 大津絵」では、大津絵の制作・販売の場、大津絵の起源、作品の時代判定等に関する先行の研究を整理、批判した上で、これら根本的な問題が行き詰った現在において、「大津絵とはなにかを、各作品そのものから知ることがもっとも大切である」と述べられる。

「Ⅱ 藤娘のルーツ」では、「祈りの心をもって神仏に奉納される」絵馬との関連に注目し、一見、世俗画・風俗画と見える大津絵藤娘図のルーツが、信仰の絵画の画題、すなわち櫓をかたげた愛宕参り女人図であることを解き明かされる。

「Ⅲ 絵馬」では、「民衆の祈りの心が、端的に見てとれる絵馬」と大津絵の画題が、両者深く絡み合いながら展開、変化する相を作品にそって説明される。

「Ⅳ 大津絵の種類」では、まず、大津絵に描かれた仏画、信仰年中行事、神像・福神・高僧、鳥獣類の作品を順次取り上げて、それらが絵馬・仏画・五月職等と密接に関連することを示し、大津絵が「祈りの画」であることを浮かび上がらせる。次に、諺題の作品を取り上げて、「教訓性をこめた世間智の世界」が戯画性を帯びて展開する面にも注目される。ちなみに、前掲『傾城反魂香』試論において、信多先生は、同曲の諺の多用の背後に諺題の大津絵の世界があり、近松がそれを強く意識して作文したことを、看破されている。

「V 大津絵の時世粧」では、近世初頭、京都の有名社寺で大津絵馬堂が建立され、そこに遊女や歌舞伎若衆など、時世を映した絵馬が奉納されたこと、その画題が大津絵にも採り入れられたことを明らかにし、風俗画が次第に大津絵画題の多くを占めていく主因をそこに求められる。

「VI 飾る時空」では、「この多彩な大津絵は、一家々々でどういうかたちで祭られ、あるいは鑑賞されたのであろうか」と問いかげ、「仏壇」「床の間」「壁」「吊り床」「屏風」等、庶民の生活空間に飾られたことを、文献に基づいて明かにされる。また「護符」として求められることもあったと述べられる。

「VII 大津絵愉快」では、柳宗光氏の名著『初期 大津絵』を高く評価し、その論旨を紹介した上で、大津絵の形質の具体的特色に迫る。続く「VIII 大津絵の文化相」でも、やはり柳宗光氏の徳川期の平民文化が大津絵の背景にあるとの指摘を踏まえて、文学と関連する事柄について具体的に考察される。信多先生の筆はあくまでも穏やかだが、大津絵の背景には文学や芸能に対する深い造詣と遊び心があり、「大津絵の持つ飄逸さは多くの文人画家の感興を誘う」レベルにあったと述べられたところなどは、柳氏のいう「平民文化」の枠を超えている。

最後に信多先生は、大津絵の、「庶民の祈りの具」から「時世粧、今様姿」への展開を確認し、それは「浮世絵の発生展開とも少しく遅ればせながら軌を一にしていた」と述べられる。そして、「大津絵模様は絵馬模様と重なり、そしてまた人模様をも確かに

映し出すものでもあったのである」（おわりに）と結ばれる。

以上、本書は大津絵とそれをめぐる人々の生の諸相を等身大に捉え、そのままそれが日本の文化の基底と結ばれていることを提示する。くりかえしとなるが、「旅人たちの手頃な土産として、また馬子でも僧に布施できる低廉な価格で売られ」、人々の生活空間の片隅を占め、曆にしたがい、また臨時に祈りの具とされた大津絵のありように即して、その魅力と真価を説かれたところに、本書の魅力と凄味がある。

信多先生はまた、近松の眼に映った大津絵の姿をも鮮明に捉えておられたのではないかと憶測するが、本書の性格上、そうした発言は控えておられる。そういった意味で、当時の時空を着実に捉えた上で、超越した個の才能と対峙、対話し、その核心に肉薄する、『にせ物語絵』（一九九五）に代表されるご論考と、本書は表裏の関係をなすように思われる。なお、信多先生は仏教版画の収集家でもあり、「特別陳列 庶民の祈り 志水文庫 江戸時代 の仏教・神道版画」（奈良県立美術館、二〇〇八）が、拝観者の眼を驚かせ、楽しませたことは記憶に新しい。

時を超えて、近松、西鶴、馬琴らと対話し、彼らの才に肉迫する、信多先生の研究の裾野に広がる、庶民の祈りと遊びに対するきめ細やかで、温かな眼差しを、改めて学ぶ機会を得た。

（思文閣出版、二〇〇九年六月、一七六頁、三三六七五円）

（かわさき・つよし 就実大学教授）